

ストア学派の論理学とアウグスティヌス 『問答法』における記号理論

須藤 英幸

問題設定

現代記号学の先駆者、ソシュールとパースにおける記号学的構造の一流流がアウグスティヌスに見出され得ることは驚きである。アウグスティヌスの記号理論は、年代順に『問答法』(弁証学) *De dialectica* (三八七年)、『教師論』 *De magistro* (三八九年)、『キリスト教の教え』 *De doctrina christiana* (三九六〜七年) において見出される。『キリスト教の教え』以降の彼の著作中で記号理論が見受けられなくなる事情から推測されるように、その使用目的は最終的に聖書解釈の基礎づけにあったように思われる。だとしても、『問答法』の分析を省略して、彼の記号理論の使用目的とその特性を正確に理解することは難しい。その理由は、修辭学の教師であったアウグスティヌスの文法学的弁証学的専門知識において、如何なる思想の下に彼独自の記号理論が生み出されたか、を探る糸口を提供するのが『問答法』だからである。

『問答法』で言語理論に適用された記号理論は、『キリスト教

の教え』において更に更に聖書解釈学と邂逅するのである。ところで、『問答法』はアリストテレスのものを含めた論理学⁽³⁾、特にストア学派のそれに大きく影響されたことが時折主張される。このような記号理論の展開とそのストア学派の論理学との関係性の下で、アウグスティヌスの独自性が問題となる。一九五七年にR・A・マークスが記号理論の言語理論への適用にアウグスティヌスの独自性を認めたのに対し、一九六九年にB・D・ジャクソンはマークスを批判して記号理論の聖書解釈への適用に独自性を求めた。一九七六年にR・H・エアーズがジャクソンを支持するも、一九九六年に出版された、一九五七年論文が再掲載される著書の中で、マークスはジャクソン批判を念頭に、「アウグスティヌスの独自性に関する私の中心的评价はまだ妥当であるように思われる」と述べている。

この問題の解決に達するためには、とりわけ、近年大きく進んだストア学派に関する最新の研究を基に、アウグスティヌスとの関係からストア派論理学を捉え直す作業が何よりも求められる。そこで本論文では、アウグスティヌスとの関係から問題となるストア学派の論理学を簡潔に把握し直した後、それとの比較検討から明らかにされる『問答法』の諸特徴を通して、また、マークス論文とジャクソン論文における各主張の分析を通して、『問答法』におけるアウグスティヌスの独自性問題の決着を探りながら、記号論導入をめぐるアウグスティヌスの思想を明らかにしたい。

一 ストア学派のセマイノン(言語的記号)とセメイオン(推論的記号)

まず第一に、ストア学派の論理学を、言語的記号と推論的記号との側面から分析したい。ここでは、言語論の指示言語とその意味内容とを概括するとともに、ストア学派の本来的記号論に関して述べる。

(一) ストア学派の言語論——シニフィアン

ディオゲネス・ラエルティオス『著名な哲学者の生涯と見解』*Vitae Philosophorum* (VP) 第七巻によれば、ストア学派の弁証法な二問答法 *διαλεκτική* は「音声」*φωνή* と「指示されるもの」*τὸ σημαίνμενον* など (VP 7.43)⁶⁾、あるいは「指示するもの」*τὸ σημαίνον* (指示言語として現代的シニフィアン significant に相当) と「指示されるもの」*τὸ σημαίνμενον* (意味内容として現代的シニフィエ significant に相当) とに分類される (VP 7.62)。指示するものとしての物体的である音声、すなわち「振動を受けた空気」*ἀπὸ περιτρεχέμενος* な⁷⁾「耳の知覚可能な固有なもの」*τὸ ἴδιον αἰσθητὸν κρούσις* と定義される音声は、「非理性的衝動」*ὁρμή* による単なる空気振動としての動物の音声と「分節化され」*ἐνσφαιστος*「思考によって発せられるもの」*ἀπὸ διατεταγμένης* としての人間の音声とに分類される (VP 7.55)。例えば「星」*Ἡμέρα* のような音声は分節された言葉 *λέξις* であり、「昼である」*Ἡμέρα ἐστὶ* のような音声は思考

によって発せられる「指示的音声」*φωνή σημαίνουσα* であるところの「主張文」*λόγος* であると考えられる (VP 7.56)。

したがって、単なる音声に対して分節化された言葉が区別されるように、言葉(レクシス)は単独で使用されるとき曖昧で「理解できない」*ἀσπαστός* ものであるのに対し、主張文(ロゴス)は常に「意味表示的」*σημαστικός* なるものである (VP 7.57)。M・バラタンによれば、音声と言葉と主張文とは古代ストア学派における指示言語(シニフィアン)⁸⁾ 分析の基本的図式であり、ピラミッド型の階層構造を持つ。例えば、「昼」は同時に音声と言葉であり、「昼である」は同時に音声と言葉と主張文であると見なされ、「意味の担い手」*porteur de signification* となるのは主張文であって、言葉は生来的な意味の担い手と考えられていない。⁹⁾

(二) ストア学派の言語論——シニフィエ

では、指示言語(シニフィアン)の意味内容(シニフィエ)とは何か。ストア学派は、アリストテレスと同様に、精神内における知性的対象を言語の直接的指示内容¹⁰⁾と見なし、外的対象物を間接的な指示対象と考へた。アリストテレスが言語生成期の社会的文化的背景において現実世界に対する言語の慣習的成立¹¹⁾を支持したのに対し、ストア学派は神の理性的世界内貫通性を根拠に世界に対する言語の自然的成立¹²⁾を支持し、世界に関する本来的な説明可能性を根拠に、人間の精神内において非物質的で知性的な「口述されうるもの」*λεκτόν*¹³⁾が人間の言語と理解との根拠として保持されるべきものと考えた。セクストス・

エンペイリコス『学者たちへの駁論』*Adversus Mathematicos* (AM) 第八巻によれば、「非物体的」*ἀσώματος* なレクトンが「指示される事柄」*τὸ σημεινόμενον ὑπὸ τῆς*」すなわち、ストア学派におけるシニフィエであり (AM 8.12)、『それは「理性的表象」*λογικὴ φαντασία* に対応して成立する (AM 8.70)。

ラエルティオスによれば、表象 (パンタシア) は「思考の幻影」*δῶκεται διαβολία* である「印象」*ἐκτύπωμα* とは異なり、「外的対象物」*τὸ ὑπάρχον* に対応する指輪の刻印のような魂の「型」*τύπος* など、魂の「変容」*ἀλλοίωσις* であつた (VP 7.50)、『魂の表象に続いて「表現可能な思考」*ἡ διαβολία ἐκτακτική* が後続する (VP 7.49)。物質主義的思考を中心に据えるストア学派は、魂における外的対象物の物質的な写しである不明瞭でない「(対象) 把握の表象」*ἡ καταληκτική φαντασία* を「事柄の真理」*ἡ ἀλήθεια τὸν πραγματικὸν* の「基準」*τὸ κριτήριον* であると考えた (VP 7.49, 54)。

他方「口述されうるもの」*λεκτόν* は「完結的なレクトン」*τὸ αὐτελές λεκτόν* と「欠如的なレクトン」*τὸ ἐλλειπές λεκτόν* とに分類され、前者に「命題」*δόγματα* や「三段論法」*συλλογισμοί* の分野が属し、後者に「述語」*κατηγόρημα* の分野が属する (VP 7.63)。非物体的であるレクトンは「魂の固有の様態」という意味で言葉や事柄や思考ではないが、「どんな言語においても考えたり表現したり理解したりすることのできる有用な対象」であり、それは「意味か事実か真か偽である」⁽²⁶⁾。すなわち、ストア学

派にとって意味づけや真偽判断の対象となるものは、「音声」でも「思考の活動」*τὸ κίνημα τῆς διαβολίας* でもなく、理性的表象に基づく「完結的なレクトン」であつて、特に「語ることによつて主張するところのもの」*ὁ λέγων ἐκφραζόμεθα* (VP 7.66) である「命題」でなければならぬ (AM 8.69, 74)。

以上から明らかのように、あらゆる音声が表示するものとなり得ようが、その中でシニフィアン・シニフィエ関係が保持されるものは、第一に主張文とそれに対応する完結的なレクトンであり、述語と欠如的なレクトンは不完全的にこの関係に含まれるものと思われる。ただし、述語だけが欠如的なレクトンと見なされていることから、レクトンには非物質的な意味を含む動詞が不可欠であるのに対し、主格名詞は欠如的なレクトンを補う働きに限定され、更に、名詞にはその物質的对象との密接な関連性ゆえに非物質の意味が含まれないために、名詞のみの音声ではシニフィアン・シニフィエ関係を保持しないかのようにと見なされている⁽²⁷⁾。

(三) ストア学派の記号論

D・セドレーによれば、アリストテレス「命題論」*De interpretatione* (DI) とストア学派のレクトンをめぐる思想は、『プラトン』『ソクレス』*Sophistes* における思考と言葉との関係(概念と単語との関係だけでなく信と文章との関係をも含む) に関する議論に立脚しており、「命題論」の主題が「完全な文章」の意味に存するように (アリストテレスは最終部で魂の様態に対

する「しる」συνβολονとして単語ではなく完全な文章を位置づける[DM 14.24b]、近年の解釈者は、ストア学派のレクトンの基本的概念を「完全文」の意味として受け取る傾向にある。

一方、G・マネットイーによれば、言語の意味論的理論における言語的記号と論理学的理論における非言語的（推論的）記号とは、排他的並行的に取り扱われた古代の二概念であって、前者にアリストテレスのσυνβολονとストア学派のσηματικονが属し、後者にアリストテレスのσηματικονないし τεκμηριονとストア学派の σημειονが属する。言語的記号（セマイノン）の領域において、ストア学派が「主張文」を、アリストテレスが「完全な文章」を各々問題の中心に据えたことは既述したが、これに関連して、ストア学派の本来的な記号と考えられる推論的記号が次の問題となる。

推論的記号（セマイオン）の説明が、『エンペイリコス』学者たちへの駁論（AM）第八巻に見出される。第一に、「推論的記号」to σημειονは「もしもこれならこれ」ei tode, tode という形を取る（AM 8.276）。そして、記号は一時的に意味が隠されたもののための「暗示的記号」σηματικον υποκνητικονと自然的に隠されたもののための「開示的記号」σηματικον ενδεικτικονとに分類され、「もし煙があれば、火がある」は煙と火が同時に観察可能なので前者に属する（AM 8.151-152）。後者の開示的記号とは、真正な「条件文（仮言命題）」συνημμενον における「前件（前提）」καθηγορευμενον であるものの「命題」δεξιλογια であ

り（AM 8.245; 250; 256）、「後件（帰結）」αληρον を開示する性質を持たなければならぬ（AM 8.252）。例えば、「もしこの女の人が乳房に母乳を含むなら、彼女は妊娠している」という真正な条件文の前件や（AM 8.252）、「もし運動があれば虚空がある。しかるに運動はある。ゆえに虚空がある」という真正な三段論法の大前提と小前提が開示的記号であり（AM 8.277）、各々直接的には判別不可能な「この人は妊娠している」と「ゆえに虚空がある」という後件を開示する。このように、推論的記号は「知性的なもの」νοητος であり（AM 8.244）、「内なる理性」o ενδιδεστος λογος と「移行的表象」μεταβατικη φαντασια や「結合的表象」συμβατικη φαντασια に基づいた人間固有の「推論（随伴関係）」の概念作用「ακολουθιας εννοια」に依存する（AM 8.275-276）。

したがって、仮言命題の場合、指示するもの（前件）は世界に対応する命題であり、指示されるもの（後件）は暗示的記号の場合は世界に対応する命題であり、開示的記号の場合は論理的推論であるが、推論的記号は真なるものであり同時に真なるものを示すものだから（AM 8.249）、前件命題と後件命題ないし論理的推論にはともに、完結的レクトンであることが要請される。よって、レクトンは言語論的枠組みにおいてはシニフィエ（指示されるもの）であり、記号論的枠組みにおいては命題と同等なものとして理解され、完結的なレクトンは世界に関する主張文の意味と見なされている。

二 アウグスティヌスにおける言語理論と記号理論の統合

彼が影響を受けたストア学派の言語論のない記号論的枠組みをアウグスティヌスの『問答法』と比較することで、アウグスティヌスの記号論的独自性を明らかにしたい。ここでは、『問答法』の概略、彼の言語理論、その記号理論への適用に関して述べる。

(一) アウグスティヌス『問答法』の概略

現代の多くの研究者は、B・D・ジャクソンとJ・ペバン以来⁽²⁾、『問答法』*De dialectica* (DD) がミラノにおける洗礼準備期間(三八七年)にアウグスティヌスによって書き始められた自由学芸諸書の一つであることを支持するようになった⁽³⁾ (cf. *Refractationes* 1.5)。少なくとも、その真作性に関して現代の学者間で積極的な反対意見は聞かれない⁽⁴⁾。

『問答法』において、アウグスティヌスは記号論を導入しながら弁証法的言語論を展開する。第一―四章では、問答法の概略が俯瞰的に示される。「言葉」*verba* は「ある―」*unum quiddam* を指示する「単純言語」*verba simplicia* (DD 1) と「多くの事柄」*res plures* を指示する「複合言語」*verba coniuncta* とに分類され、後者は「未完成文」と「完成文」*sententia* に分類され、更に後者は真偽の対象にならない文と「討論者」*disputator* が要求される「完全文」(命題)に分類される (DD

2)。命題は「単純なもの」*simplices* と「複合的なもの」*coniunctae* とに分類され、後者に三段論法が含まれる (DD 3)。したがって、問答法が扱う「分野」*partes* には、「問答法の構成要素」*materia dialecticae* を扱う「単純言語の分野」*de loquendo*、不完全文と討論者を要求しない文を扱う「表現文の分野」*de eloquendo*、判断が要求される文を扱う「主張文の分野」*de proloquendo*、帰結を導く文を扱う「主張文の最高分野」*de proloquiorum summa* が含まれる (DD 4)。このうち『問答法』第五章以下で扱われるのは「単純言語の分野」⁽⁵⁾ すなわち、単語分析のみであることをまず念頭に置く必要がある。

(二) アウグスティヌスの言語理論

では、アウグスティヌスの言語理論とは何か。その理解の糸口となる重要な箇所が、『問答法』第五章に見出される。

それゆえ、(ある)言葉 *verbum* が口から発せられるとき、もし、自らのために、すなわち、言葉それ自体をめぐって何かが問われたり論考されたりするために発せられるのであれば、確かに論考や問いの主題が事柄⁽⁶⁾であって、この事柄それ自体が「言葉」*verbum* と呼ばれる。しかしながら、耳ではなく魂が言葉から知覚し、魂それ自体によって保持される内包 *inclusum* は、何であれ「口述可能なもの」*dicibile* と呼ばれる。言葉が自らのためでなく他の何か *aliud aliquid* を指示するために発せられるとき、「口述」*dictio* と呼ばれる。しかし、言葉でもなく精神における言葉

の概念 *conceptio* でもない事柄それ自体は——それによって指示され得るところの言葉^{res}を所持しようがしまいが——差し当たり適切な名称によって「事柄」*res*以外の何かと呼ばれることはない^(DD 5)。

例えば、『アエネーイス』の巻頭文である“*Arma virumque cano*”（私は歌う、武器「戦争」と人とを）に関して、文法家が「アルマの品詞は何か」と問う場合の「アルマ」は「言葉」それ自体を意味するが、著者のウエルギリウスが述べる「アルマ」は「口述」であって武器が戦争を指示し、それが現存するとき触れることができる「武器」や指で指し示すことができる「戦争」は「事柄」である^(DD 5)。

ストア学派との比較から見えてくるアウグスティヌスの言語理論の第一の特徴は、「言葉」にしろ「口述」にしろ、指示するものとしての音声^{res}が単語と考えられていることである。しかも、ストア学派では単独使用された動詞以外の名辭に対応するレクトン^{lectio}が成立しなかったのに対し、アウグスティヌスの単語はすべてに「口述可能なもの」*dictabile*（「言葉の概念」と読み取れる）が対応しているように見える⁽³³⁾。第二の特徴は、音声のうち「口述」*dictio*に重点が置かれることである。ストア学派において、名詞が単独で使用される場合、指示されるのはレクトンではなく「格」であるという議論があったように^(AM 11.29)、アウグスティヌスは音声^{res}がそれ自体を指示する場合は格（品詞）的な意味で「言葉」であると考えている。他方で、「口述」は「事柄」

を指示することができ、言語の潜在性がここに現れる。第三の特徴は、「事柄」*res*の内容の包括性である。アリステレスの事柄 *dykta* にしてもストア学派の事柄 *dykta* にしても、それは外的対象や現象に留まった。他方、アウグスティヌスの事柄は、「言葉でもなく精神における言葉の概念でもない事柄」であり、「キリスト教の教え」では「事柄でないものは全く無である」^(DDC 1.2.2)と述べられていることから、事柄には物体と非物体のすべての存在が包括されるようになった。

(三) アウグスティヌスによる記号理論の適用

【問答法】第五章の冒頭では、次のように記号論理が導入される。

言葉 *verbum* はある種の事柄の記号 *rei signum* であり、それは聞き手によって理解される *intelligi* ことができ、話し手によって発話される *prolatum* ことができる。事柄 *res* は知覚されたり *sensiri* 理解されたり *intelligi* 隠されたり *latere* する。記号は感覚器官にそれ自体を現し、同時に、それ以外に魂に何か *aliquid* を現すものである。話すこと *loqui* は文節化された音声によって記号を与えることである^(DD 5)。

言語理論では、ストア学派とアウグスティヌスとともに「指示するもの」(シニフィアン)と「指示されるもの」(シニフィエ)という枠組みで展開される共通性があったが、記号理論に対する両者の扱いには相当な隔たりがある。上述したように、スト

ア学派は記号を推論的枠組みで使用し、記号は仮言命題における前提であつたが、アウグスティヌスの記号は——ストア学派の理論からすれば大胆であろうが——言葉そのものである。そして、それは言葉の単独使用では主張の曖昧性のゆえに明確なものは何も指示されないとストア学派が考えたところの単語である。『教師論』では、“Si nihil ex tanta superis placet urbe reinqui”（もしかの偉大な都市から何も残されないことが喜ばしいことならば）⁽³⁸⁾ という八単語から構成される条件文が「八つの記号」と呼ばれ、この種の仮言命題を一つの記号と考えたストア学派と大きく異なる。

第一に注目すべきことは、言葉の認識論的観点である。各々の記号は、音声⁽³⁹⁾が分節化された音そのものを聴覚に与えると同時に、魂に「何か」を与えることで意味伝達が達成されるのであり、この過程は音声によつて記号を与えるところの「話すこと」である。そして、⁽⁴⁰⁾「魂が魂に与える「何か」は「言葉の概念」であると考えられる。ただし、意味づけの対象がストア学派では完結的レクトンであつたのに対し、アウグスティヌスにおける言葉は「事柄の記号」であり、その意味づけの対象は事柄である。第二に注目すべきことは、言葉の指示作用である。

言葉は「事柄の記号」であるのだから、「事柄」*res* *signata* ではなく「魂における受動様態」*res* *in* *anima* *signata* が「音声における言葉」*res* *in* *sonis* の「しるし」*significatio* であると考えたアリストテレス (*DT* 1.16a) と相違する。アウグスティヌスの

場合、言葉が指示するものは包括的意味を有する「事柄」である。以上より、言葉は記号として魂に言葉の概念（口述可能なもの）⁽⁴¹⁾ を与え、かつ、事柄を指示するのである。

『問答法』の主要な言語論的枠組みは「口述」*dictio*、⁽⁴²⁾「口述可能なもの」*dictibile*、⁽⁴³⁾「事柄」*res* であつたが、アウグスティヌスは言葉に記号的役割を与えることで、口述は、言葉として口述可能なものを魂に与えつつ、記号として事柄を指示するという二重の働きを演じることになる。ストア学派では、すべての言語の自然的成立、更に外的対象物の刻印である物質的表象という彼らの思想に基づき、主張文としての言葉のシニフィエが専ら内面的なレクトンに求められ、世界との直接的係わりのある推論は——これもレクトンに還元されてしまう傾向にあるが——言語論と区別された。一方、アウグスティヌスは直接的であれ間接的であれプロティノスからの影響を受けて魂の非物体性を主張し、アリストテレスやストア学派に見受けられる魂の物質的要素ゆえの受動的様態性を否定する。加えて、アウグスティヌスは、すべての言葉の自然的成立を強調するストア的思想を否定する (*DD* ②)。その結果、非物質的な魂は物質的な世界に対して独立性と自主性を確保することができたのであり、その下で、言葉が魂と世界の両者に関係するような言語構造が単語的記号理論の導入によつて達成されたのである。

三 マークス説とジャクソンのマークス批判

ここでは、アウグステイヌスの独自性問題に関わるマークス説とジャクソン説を取り扱う。第一にマークス説を概略し、その後、ジャクソンによるマークス批判を検討することを通して、記号論導入に関するアウグステイヌスの思想を鮮明にしたい。

(一) アウグステイヌスの独自性をめぐるマークス説
アウグステイヌスの記号理論と言語理論との関係を、マークスは次のように述べる。

ともかくもどんな理由であれ、言葉はアウグステイヌスにとって卓越した記号であり、彼の記号理論は、(言語理論以外の)他種の記号理論だけでなく言語理論でもあることに初めから定まっている。意味をめぐる彼の思索の独自性と、彼の関心の多くを集中させるための思索の能力とは、この事実³³に存する。

ストア学派の言語理論では、例えば、単独使用される言葉 $\alpha\gamma\alpha\iota\varsigma$ の「煙」(a)は代替的に外的対象物の表象ないし概念(b)を表示するのみであり、その代替関係 $\alpha\alpha\parallel b$ の主張は何も意味していないことになる。しかし、主張文 $\alpha\gamma\alpha\iota\varsigma$ の「もし煙があるとするれば」(文t)はその内容である口述されうるもの $\alpha\epsilon\kappa\tau\acute{o}\nu$ (p)を意味している(文t $\parallel$ p)。他方、ストア学派の論理学では、前件「もし煙があれば」(p)に対して後件の「火がある」(q)が得られ、推論関係 $\langle p \cup q \rangle$ が成り立つ。これ

に対し、アウグステイヌスはストア学派の枠組みを利用しつつ記号論を単語に適用し、口述 $\alpha\chi\eta\acute{o}$ の「煙」(a)が魂に口述可能なもの $\alpha\chi\eta\eta\acute{o}$ (b)を与えつつ $\alpha\alpha\parallel b$ 、實在的事柄 $\alpha\epsilon\varsigma$ の煙(r)を指示し $\langle a \cup r \rangle$ 、更に、事柄の煙(r)が別の事柄である火(s)を指示する $\langle r \cup s \rangle$ という言語構造を構築する。すなわち、口述の「煙」が聴覚を通して記号と同定され、音声 $\rho\omicron\mu\eta\iota$ 指示対象物 $\sigma\iota\gamma\mu\alpha\tau\iota\varsigma$ の、すなわち、記号 $\sigma\iota\gamma\mu\alpha\tau\iota\varsigma$ 事柄 $\alpha\epsilon\varsigma$ の関係的知識を基に、魂において口述可能なものとして受け取られ、引き続いて、精神が指示される實在の煙の意味として想定し、更に、随伴的意である火の實在性を探求するという構造である。このように、アウグステイヌスにおける言葉の意味は、ストア学派のように内面的なレクトンに留まることなく、包括の意味を有する事柄に開放されているのである。したがって、言語理論に記号理論を適用することで、アウグステイヌスは意味への徹底した思索に向かうことができた³⁴と考える。マークスは、正鵠を射ているように思われる。

また、アウグステイヌスが記号理論を言語理論に適用する理由を、マークスは前述した引用文の直前で次のように述べる。

記号理論の点から理解された言語理論を提示することに資した一層強力な作用因子は、十中八九、聖書的記号に対するアウグステイヌスの関心の高さである。記号体系としての言語理論は魅力的であつたに違いない。なぜなら、それは聖書の字義の意味と比喩的ないし予型的認識との二つの

問いを「記号」という首座の下に運び込む可能性を確保するからである。

マークスによれば、記号体系としての言語理論は、言語の記号的働きのゆえに、字義的解釈と比喩的解釈を統括することができる。上述した議論に従えば、口述の「牛」(a)が魂に口述可能なもの(b)を与えつつ(a||b)、実在的事柄の牛(r)を指示すること(aUr)が字義的解釈であり(a||b)かつ(aUr)、比喩的解釈は、これに加えて、事柄の牛(r)が別の事柄である伝道者(s)を非言語的に指示(転義)することである(rUs)。これは、『キリスト教の教え』において扱われる聖書解釈学の基本構造である(DDC 21016)。アウグスティヌスの記号論導入の理由に関しては、ジャクソンはマークスに反論せず、アウグスティヌスが「記号＝言語」理論を聖書の解釈に適用したことにこそ彼の独自性が見出されることを主張する。

(二) ジャクソンのマークス批判とその検証

ジャクソンはマークスを批判して、次のように述べる。

マークスは、アウグスティヌスの記号理論の独自性が、その言語理論としての使用法にあることを論じた。しかし、私が引用したテキストによれば、ストア学派は言語的表現の意味理論において記号を論じたことが示される。人は、言語論的記号 *ἡ σημασις* が記号のことではないと主張する場合に限って、ストア学派は記号理論を言語に適用しな

かったのだと言うことができる。彼らの詳細な推論理論において、彼らはより一般的な推論的記号 *ἡ σημασις* を非言語的に使用した。「記号」のためのこれら二つの用語が如何に関係づけられるかは不明であるが、アウグスティヌスの「記号」*signum* は両方の意味合いの何ものかを保有する。……このように、アウグスティヌスの「記号」の使用法は、新奇であるどころか、ストア派的伝統と一致しているように思われる。

マークス批判をするジャクソンの拠り所は、ストア学派の「言語論的記号 *ἡ σημασις* が記号のことではない」ことへの反論である。また、ジャクソンは、言語論的記号(セマイノン)と推論的記号(セメイオン)との関係を「不明である」とも述べる。もしこの両者が系譜の異なった別種の記号であり、それぞれが独自の歴史的哲学的背景を持つものであって、それゆえ、ストア学派が両者を混同させることはなかったのだとすれば、言語的記号は厳密には推論的記号と区別され、ジャクソンは批判的論拠を失うことになる。実際に、それぞれ「言語的記号」「推論的記号」と訳され得る二つの記号概念、すなわち、セマイノンとセメイオンは、アリストテレスにおいてもストア学派においても、別種の記号概念である。

また、ジャクソンは、アウグスティヌスの言語理論において、意味の担い手が主張文(ロゴス)から単語(レスシス)へ移ったことをほとんど無視している。アウグスティヌスは、おそら

く、アレキサンドリアの文法家の影響を受けて、シニフィアンとしての主張文を単語に置き換え、更に記号理論を適用し、単語を記号として定義し直している。単語を記号と考えることは古代では新奇であり、これが更なる新奇を生んでいる。ストア学派では、主張文のシニフィエが「口述されうるもの」*dicibile*であったが、アウグスティヌスは、主張文のシニフィエを単語のシニフィエに置き換え、これを「口述可能なもの」*dicibile*と名付けた。*dicibile*はアウグスティヌスが用いたレクトンの翻訳であると考えられているが、レクトンと口述可能なものとの間には、本質的な相違がある。例えば、「*Deus caritas est*」(「神は愛である」)という文章の場合、ストア学派の見解では記号とレクトン(文章の意味)は各々一つであるのに対し、アウグスティヌスでは記号と口述可能なものは各々三つとなる。このことから推測されるに、口述可能なものを単語に対応させるアウグスティヌスの第一の目的は、文章全体の意味把握以前に最小単位である単語の吟味方法を構築することである。例えば、口述の「神」*Deus*は何らかの概念を魂に与えはするが、その内容を明白に意味する訳ではないため、精神は(先行的な事柄把握と聖書全体の教えを基礎に)思索を通して指示される事柄を探求しなければならない。そして、「神」の概念が明らかになるに従って、「神は愛である」という文章の意味も自ずと明らかになるであろう。アウグスティヌスの第二の目的は、文章全体よりも、文章における特定の単語や節に象徴的働きを担わせること

である。こうして初めて、アウグスティヌス独自の転義的記号の道が開かれるのである。

このように、アウグスティヌスはストア学派の論理学の形式を最大限に利用しつつも、言語理論と記号理論を統合し、全く新しい概念の導入を企てている。T・トドロフが述べる対比事項⁹⁴、すなわち、アリストテレスの「しるし」記号の対比、ストア学派の「シニフィアン／シニフィエ」記号の対比、クレメントの「直接的言語－間接的象徴的言語」の対比を部分的に解消するような「キリスト教の教え」で明らかにされる「本来的記号 *signa propria*－転義的記号 *signa translata*」の対比(DDC 2.10.15)が、「問答法」において基礎づけられたのである。結局のところ、ジャクソンは、記号論をめぐるアウグスティヌスとストア学派との類似性を過度に強調したため、記号論の議論そのものにおけるアウグスティヌスの独自性を見失ってしまったのではなからうか。

アウグスティヌス研究において見落とせないものの一つに、神のための思想的再構築を可能にする彼の天才的な総合的能力がある。U・デュクドウが述べるように、アウグスティヌスは受け取った古代の伝統を直ちに自分のものに変えてしまうことができたのであって、その天賦を通して、彼はキリスト教文化の堅固な礎石を置くことができる第一人者となったのである。

tinienne du signe,” 262.

- (27) Gerard Verbeke, “Meaning and Role of the Expressible (λεκτόν) in Stoic Logic,” in *Knowledge through Signs: Ancient Semiotic Theories and Practices* (ed. Giovanni Manetti; Bologna: Brepols, 1996), 133-154, esp. 145.
- (28) アリストテレスによれば「各語」δύομαは「慣習に従った指示的な指し」φωρη σηματικῇ κατὰ συνθήκην による (De interpretatione 2.16a.20-21: LCL 325, 116)°
- (29) Cf. A. A. Long, “Stoic Linguistics, Plato’s *Cratylus*, and Augustine’s *De dialectica*,” in *Language and Learning: Philosophy of Language in the Hellenistic Age* (ed. D. Frede and B. Inwood; Cambridge: Cambridge University Press, 2005), 36-55. 以下「Long」は「ストア学派の語彙学的血縁主義」トレン「メテチャロス」における「メテ」の形相語血縁主義を意味する造形である。
- (30) Verbeke, “Meaning and Role of the Expressible (λεκτόν) in Stoic Logic,” 145-146.
- (31) Sextus Empiricus, *Against the Logicians* 巻1第291 (LCL 291; Cambridge: Harvard University Press, 1935) は聖知たる“Loeb 1.25” *Adversus Mathematicos* 巻1「大論」第17「八巻」第16「十巻」第11巻などによる *Against the Professors’ Against the Logicians’ Against the Physicists’*
- Against the Ethicists* として収録される。AM 八巻の邦訳は、金山弥平・金山万里子訳のセクストス・エンペイリコンス「学者たちの駁論2」(西洋古典叢書「二〇〇六年」に、またその一部が、水落健治・山口義久訳のクリュシッポス「初期ストア派断片集2」(西洋古典叢書「二〇〇二年」に収録される。
- (17) ストア学派によれば、物的なもののみが存在し、非物的なものも存在しない。非物的なものと考えられるのは「□板とそれ以外の」λεκτόνの例で「虚語」κενός「場」τόπος「空間」χρόνος による (AM 10.218, i.e. Sextus Empiricus, *Against the Physicists* 2.218 [LCL 311, 318; Cambridge: Harvard University Press, 1936])° 「ストア派は物質的なものと非物質的なものを高次で包括するものとして「物理的」ものを要請し、物理的なもの (cf. A. A. Long and D. N. Sedley, *The Hellenistic Philosophers* [Cambridge: Cambridge University Press, 1987], 127, 162-163; II.27, 166-167)° トレンは「物理的」は「物理的」である (A. A. Long, “Language and Thought in Stoicism,” in *Problems in Stoicism* [ed. A. A. Long; London: The Athlone Press, 1971], 88)°
- (21) Long, “Stoic Linguistics, Plato’s *Cratylus*, and Augustine’s *De dialectica*,” 46.
- (19) アリストテレスによれば「単語使用としての『動語』φύμα

は「名辞」ὄνομαと同じように「部分」としては(文章から)分離されては何ものも指示しない」 μέρος οὐδὲν σημαίνει ὅπῃς (*De interpretatione* 3.16b.6-7; LCL 325, 118)。

- (20) AM 8.11-12は例外的な用法が見受けられる。そこでその音声としての固有名詞「テイオーン」が「指示するもの」σημαίνονとされ、音聲によつて知られ、思考に従つて成立する「事柄」πραγμάτιαが「指示されるもの」σημαιόμενονとされる。この「事柄」は「テイオーンその人である」「対象物」ὄντωνονと表現なることからレクティオンとも解され得るが、LongとSedneyは、AM 11.29で普通名詞の「大」μέγαと指示されるように「格」πρόσαςとされるように、単独使用の名詞はすべて指示されることをナンセンびちなへ、固有の「性質」は必ずその名辭を伴ふ(Long, “Language and Thought in Stoicism,” 105-106; Long and Sedley, *The Hellenistic Philosophers* I. 33, 200-201; II. 33, 197)。
- (21) テキストは、Aristotle, *The Categories; On Interpretation; Prior Analytics* (LCL 325; Cambridge: Harvard University Press, 1938)を使用した。
- (22) David Sedley, “Aristotle’s *De Interpretatione* and Ancient Semantics,” in *Language and Learning: Philosophy of Language in the Hellenistic Age* (ed. D. Frede and B. Inwood; Cambridge: Cambridge University Press,

2005), 87-108, esp. 96-97.

- (23) 言語が「意味作用と指示作用との相違」から分析されるようになったのはプラトンやアリストテレスからであり、それ以前では、例えば、一方でヒッポクラテスが σημεῖονや tekniptiov を症状の病氣に対する「糸口」として使用し、他方でパルメニデスは「名称」ὄνομαを「現実との疑似等価性」によつて「現実を隠す」ものと見てゐる(ウンベルト・エーコ、谷口勇訳「記号論と言語哲学」国文社、一九六六年、六〇—六二頁)。

- (24) Giovanni Manetti, “Introduction: The Concept of the Sign from Ancient to Modern Semiotics,” in *Language and Learning: Philosophy of Language in the Hellenistic Age* (ed. D. Frede and B. Inwood; Cambridge: Cambridge University Press, 2005), 11-40, esp. 14-15.

- (25) ストイキ派の記号論はプリニウス(2.27.70a.8-9 (LCL 325, 522))では「記号」σημεῖονが「指示語(前提命題)」πρότασις, δροσευκριτή と置かれる。

- (26) B. Darrell Jackson, “Introduction,” in *Augustine, De dialectica* (trans. B. D. Jackson; text ed. Jan Pinborg; Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1975), 1-75; Jean Pépin, *Saint Augustin et la dialectique* (Villanova: Villanova University Press, 1976), 21-60.

- (27) Baratin, "Les origines stoïciennes de la théorie augustinienne du signe," 260; Maria Bettéini, "Agostino d'Ippona: i segni, il linguaggio," in *Knowledge through Signs: Ancient Semiotic Theories and Practices* (ed. Giovanni Manetti; Bologna: Brepols, 1996), 207-272, esp. 213; Michele Malatesta, "*Dialectica, De*," in *Augustine Through the Ages: An Encyclopedia* (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1999), 271-272.
- (28) Christopher Kirwan, *Augustine: The Arguments of the Philosophy* (London: Routledge, 1989), 35; 木暮建治「トマス・アクィナスの『De Dialectica』の論理問題と『トマス・アクィナスの著作』——『西論抄』と大キリスト教研究の発展——」『西論抄』14号、1991年12月、14頁; Long, "Stoic Linguistics, Plato's *Cratylus*, and Augustine's *De dialectica*," 50. 現代の学者は彼について「本論文は『De dialectica』がアウグスティヌスの真作であるという前提の下に議論を進める」。
- (29) Long, "Stoic Linguistics, Plato's *Cratylus*, and Augustine's *De dialectica*," 50-51.
- (30) *DD* 5 (Jan Pinborg, 88): Cum ergo verbum ore procedit, si propter se procedit id est ut de ipso verbo aliquid quaeratur aut disputetur, res est utique disputationi quaestioniue subiecta, sed ipsa res verbum vocatur. Quidquid autem ex verbo non aures sed animus sentit et ipso animo tenetur inclusum, dicibile vocatur. Cum vero verbum procedit non propter se sed propter aliquid aliquid significandum, dictio vocatur. Res autem ipsa, quae iam verbum non est neque verbi in mente conceptio, sive habeat verbum quo significari possit, sive non habeat, nihil aliud quam res vocatur proprio iam nomine. トマス・アクィナス『*De dialectica*』(trans. B. D. Jackson; Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1975) 224-225. 木暮建治『Jan Pinborg 著『西論抄』の論理とトマス・アクィナスの『De dialectica』』(trans. 木暮建治; 東京: 法政大学出版局, 1997) 16, 21.
- (31) Jackson, "The Theory of Signs in St. Augustine's *De doctrina christiana*," 16, 21.
- (32) Marrou はトマス・アクィナスの時代的風潮からの影響や見て取り、「トマス・アクィナスの『De doctrina christiana』の断片に分解することから構成される、世俗の文法家から受け継がれた習慣を強化するところの風潮は、厳正な人倫と徳の（の断片）を個別の考察するところの風潮に代わる」（Marrou, *Saint Augustin et la fin de la culture antique*, 480: Tendence que renforce l'habitude, héritée du grammairien profane, qui consiste à lire le texte verset par verset, à le commenter mot par mot, à le décomposer en fragments isolés qu'on examine

の實體に於ける「形相」といふの实体」 *ovōta ... ἡ korā tòv λόγον* (わがゆるな、識の實體は形相と蘇林と)といふ相対的な関係 (De anima 2.1, 412a-b: LCL 288, 68-70)。

- (22) Markus, "St. Augustine on Signs," 65: At any rate, whatever the reasons, words are for Augustine, signs *par excellence*, and his theory of signs is meant to be, from the start, a theory of language as well as of other types of sign. In this consists the originality of his reflection on meaning, and its ability to focus so many of his interests.

- (44) Markus, "St. Augustine on Signs," 65: A more powerful influence which would tend to suggest a theory of language conceived in terms of a theory of sign was, in all probability, the primacy in Augustine's interests to Scriptural 'signs'. A theory of language as a system of signs must have been tempting, since it secured the possibility of bringing under one head, that of 'sign', the two enquiries into the literal meaning and the figurative or typological sense of Scripture.

- (45) Jackson, "The Theory of Signs in St. Augustine's *De doctrina christiana*," 49.

- (46) Jackson, "The Theory of Signs in St. Augustine's *De doctrina christiana*," 48-49: Markus has argued that the

originality of Augustine's theory of signs lies in its use as a theory of *language*. But the texts which I have been citing show that the Stoics did speak of signs in their theory of the meaning of linguistic expressions. Only if one insists that *τὸ σημαῖνον* does not denote a sign, can one say that the Stoics did not apply a theory of signs to language. They used the more common *τὸ σημαῖνον* non-linguistically in their elaborate theory of inference. It is not clear how these two terms for 'sign' are related, but Augustine's '*signum*' has something of the connotation of both. ... Thus, instead of being novel, Augustine's use of 'sign' seems to be in agreement with the Stoic tradition.

- (47) Manetti, "Introduction: The Concept of the Sign from Ancient to Modern Semiotics," 14-15.

- (48) Baratin, "Les origines stoïciennes de la théorie augustinienne du signe," 263.

- (49) Baratin, "Les origines stoïciennes de la théorie augustinienne du signe," 265.

- (50) John M. Rist, *Augustine: Ancient through baptized* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), 28-29; Long, "Stoic Linguistics, Plato's *Cratylus*, and Augustine's *De dialectica*," 52.

- (51) Jackson は“tektor”と“dicibile”の類似点を列挙するが相違点を無視している (Jackson, 47-48)。
- (52) 聖書全体の教え、すなわち、聖書解釈学における「事柄」res は、「キリスト教の教え」第一巻で扱われる。
- (53) エーロ「記号論と言語哲学」, 七三—七五頁。
- (54) Tzvetan Todorov, *Théories du symbole* (Paris: Editions du Seuil, 1977), 50.
- (55) それにもかかわらず、シャクソン論文は非常に優れた研究であることに違いはなく、特に、そのA部は特出してい^る。
- (56) Ulrich Duchrow, “《Signum》 und 《Superbia》 beim jungen Augustin (386-390),” *Revue des Études Augustiniennes* 7/4 (1961): 369-372, esp. 369.